

PLUS CYCLE ケースレポート

～ 頸部痛の 1 例 ～

股関節脱臼保存療法中のトイプードルに PLUS CYCLE を装着し経過観察を行っていたところ、頸部痛の早期対応に繋がった 1 例がありましたのでご紹介します。

■要旨

股関節脱臼のトイプードルに PLUS CYCLE を装着し保存療法の経過観察を行っていたところ、「活動量の低下／元気がない」という主訴にて来院があり頸部痛が認められた。その後、NSAIDs の処方により頸部痛が消失。それらの治療過程についても、PLUS CYCLE を活用したところ、活動量の増加・安定が認められた。

■症例

品種	性別	年齢	診断	処置	データ 取得期間
トイプードル	去勢オス	10 歳 4 カ月	頸部痛	NSAIDs を処方	2 年弱

既往症・その他症状： 股関節脱臼、両側膝蓋骨内方脱臼グレード II

■経過・処置

2021 年 4 月： 股関節脱臼を主訴として来院。非観血的に股関節脱臼を整復し、保存療法の開始。その後、股関節脱臼は保存療法により良好にコントロール。

2022 年

7 月 7 日： 「2 日前から元気がない、いつもと違う」と来院

血液検査に著変なし、痛みがありそうだったため NSAIDs を処方

7 月 12 日： 身体検査にて頸部痛を認める

「NSAIDs を服用してから元気になってきた」とのこと

7 月 26 日： 身体検査により頸部痛の消失を確認

NSAIDs を減量（両側膝蓋骨内方脱臼グレード II のため、アンチノール

は服用のまま）

8 月 19 日： 頸部痛が完全に消失

通常通りの股関節脱臼および膝蓋骨内方脱臼の経過観察状態となった

※その他、加療なし。

■PLUS CYCLE の利用

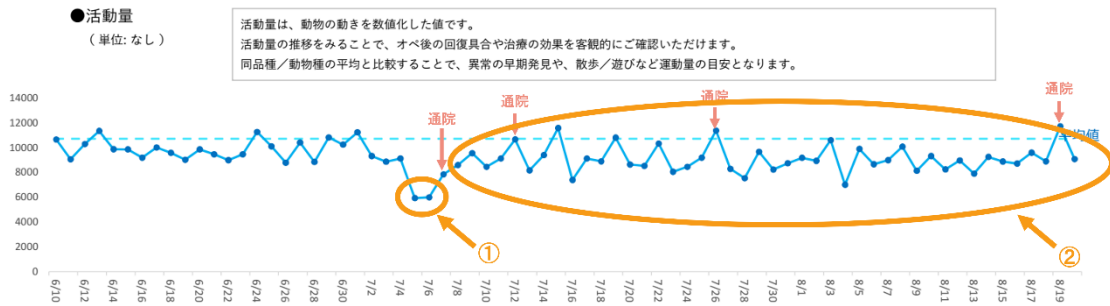
- ・ 2021 年 4 月：股関節脱臼の経過観察のため PLUS CYCLE を装着しデータ取得を開始
- ・ 飼い主：スマホアプリにて活動量・ジャンプ回数・睡眠／休息時間を確認
- ・ 動物病院：PLUS CYCLE レポートにて定期的にデータ推移を確認

■結果

PLUS CYCLE のデータより、患者状態について以下の様なイメージができた。

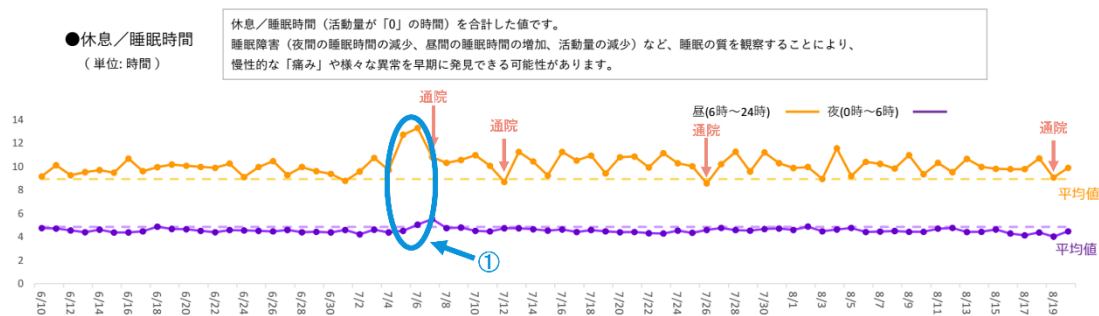
【活動量】

- ① 主訴「2 日前から元気がない」の期間について、活動量の顕著な低下が認められた
- ② NSAIDs の服用により頸部痛が消失し、活動量が元の値とほぼ同等まで増加・安定していく過程が認められた



【休息・睡眠時間】

- ① 主訴「2 日前から元気がない」の期間について、頸部痛により昼間の休息・睡眠時間が顕著に増加していたが、夜間の睡眠時間にはそれほど影響がなかった



上記の通り、頸部痛が発症したと考えられるタイミングで活動量が著しく低下し、睡眠／休息時間の増加が認められた。また、NSAIDs による鎮痛により、それらの変化はほぼ元の値に戻ることが確認できた。

これらの結果より、PLUS CYCLE を活用することにより、頸部痛を活動量の低下／休息・睡眠時間の増加として早期発見できる可能性が示唆された。

■担当獣医師のコメント

京都中央動物病院 院長 村田裕史先生

本症例は、股関節脱臼の非観血的整復後の再発モニタリングおよび両側の膝蓋骨内方脱臼グレードIIに対する疼痛などのモニタリングのため、PLUS CYCLEを長期間装着している症例となります。幸いなことに、観察している約2年間では股関節脱臼の再発もなく、膝蓋骨内方脱臼による跛行や膝の疼痛も認めておりません。



しかし、この長期の経過観察の期間において、頸部痛が認められ、NSAIDsと安静による保存療法を実施するタイミングがありました。このときの頸部痛の発症と改善に関連し、PLUS CYCLEのデータにおいても、活動量は低下、そして、通常への活動量の増加が認められ、休息・睡眠時間は増加から通常への低下が認められました。

一般臨床の現場において、様々な疼痛を呈する動物を診察する機会は少なくないですが、疼痛は血液検査などとは異なり客観的に表すことが難しく、治療効果の判定に苦慮します。今回の症例はそのような疼痛をPLUS CYCLEのデータにより、担当医、飼い主様ともに確認することができ、疼痛の新しいモニタリング方法の可能性を感じることができました。

■飼い主様のコメント

coco は初めてお迎えしたわんこで、股関節脱臼になったことをきっかけに PLUS CYCLE を使い始めました。しばらくは活動量の数値が下がることもなく「大丈夫そうかな？」と少し不安に思いながらも coco とすごしていました。



今回、初めて活動量がガクッと落ち、元気もなかったので病院で診てもらうと、首に痛みがあることが判り「ここまで顕著に変化が現れるのか！」と驚いたのと同時に、いつもの活動量を保っていることの大切さがわかりました。

わんこは言葉が話せないため、いままで「痛いのかな？」「調子悪いのかな？」と感覚に頼っていましたが、PLUS CYCLE を使うことで数値で確認できるようになり、大きな安心につながりました。

また、PLUS CYCLE のデータは動物病院の先生にも見てもらえるので、更に安心です。もし利用を検討されている方がいましたら、お散歩だけではなく 24 時間つけて、日々の変化を確認する健康管理法がおすすめです！

■まとめ

本症例への PLUS CYCLE の活用について、以下の特徴が認められた。

- ✓ 飼い主の主訴「元気のなさ（後に頸部痛と診断）」と、PLUS CYCLE の活動量の低下について相関が認められ、活動量の低下により「痛み」の検出ができる可能性が示唆された
- ✓ NSAIDs の服用により、頸部痛で減少していた活動量が元の数値まで回復することが確認できたことから、「痛み」に対する治療効果測定に PLUS CYCLE が利用できる可能性が示唆された

■PLUS CYCLE スタッフより一言

頸部痛の検出、および、NSAIDs による痛みの鎮痛効果が、活動量の低下や、睡眠／休息時間の増加という客観的データとして確認でき、痛みについても臨床的指標の Supportive Data として利用できる可能性が示唆されました。本ケースでも認められた夜間の睡眠／休息時間の変化は、「疼痛」だけでなく「痒み」についても同様に指標とされていますので、様々な臨床のシーンにおいて夜間の活動量／睡眠時間をご参考にして頂ければと思います。

以上